



スリヤピーク山頂

今までは、海外の山はアルパインツアー、国内の山は毎日新聞旅行、と決めていた。ともにその分野ではトップシェアを保っているはずである。しかしここ数年、毎日新聞旅行の海外も結構力を入れてメニューも中身が濃くなってきていることがカタログの内容からうかがえるようになってきた。そこでまずこの3月にゴークョピークからレンジョパスを経由して帰るというのがあったので応募したのであるが、成立しなかった。次にこのスリヤピークが目にとまった。両方ともアルパインツアーのメニューにはない。まあこれでネパールヒマラヤは8回目になってしまう。インドとパキスタンを含めると10回目のヒマラヤということになる。

このツアーの正式名称はゴサインクンドトレッキングとスリヤピーク 5 144m 登頂である。“と”で結んだ前後の区分けをした意味を後になっていやというほど知らされた。

出発前日にツアーリーダーの渡辺さんから電話が入った。“何かわからないことでもありませんか？”アルパインツアーではこんなことはない。まあ旅支度なんて慣れてはいるが、一つ聞いてみた。“男と女の割合はどのくらいですか？”。答えは、“男は高橋さんだけで、あとの7人は女性です”。またウハウハか。俺の場合ケッコウ慣れている。2014年のジョンミューア（アメリカ）、知床の流氷ウォーク、2006年のアシニボイン（カナダ）などはこのパターンであった。一人部屋追加料金を払わなくても一人部屋を確保できる。周りが女

だらけといったって、よだれが垂れるようないい女なんているはずもなく、役所の書類の都合上女の項目に○が付くというのしかいないことは判りきっている。女性で海外の山に気楽に来る人は、家庭を持っていてもいなくても定年になるまで仕事をしていた人が多い。今回も特にアンケートを取ったわけではないが、10日も一緒にいると話の中からそんな様子が受け取れる。ダンナに気兼ねをしながら来ているような人はまずいない。財布の独立性も保持しているに違いない。

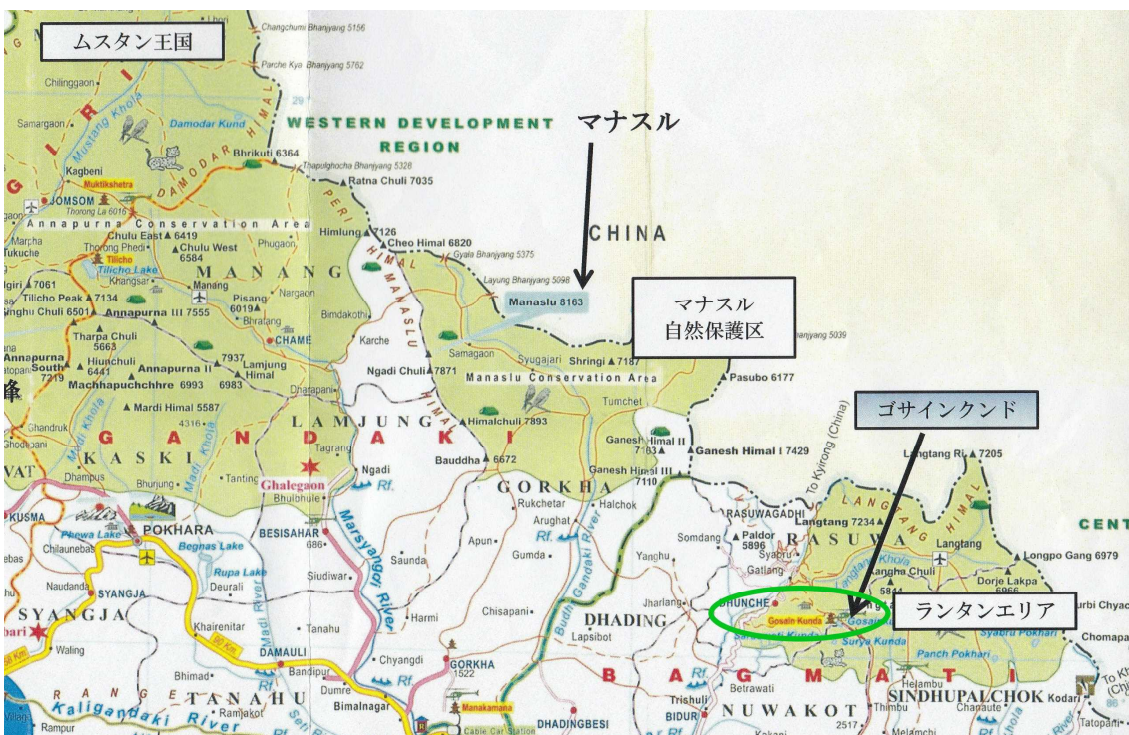
1 ドウンチェまで

成田から香港を経由してカトマンドゥに入る。今までのツアーではバンコックで1泊することが多かったが、このほうが早くていい。アルパインのカタログを見ても最近はこのほうが多いようだ。キャセイパシフィックも機内映画のサービスなどはケッコウいい。アメリカのミュージカル映画のシカゴ（2002年）を見て満喫した。日本映画が2本くらいと日本語字幕の映画が10本くらいあった。



カトマンドゥには23時ごろについて翌朝8時にはドウンチェに向けて7時間のドライブの出発である。しかし飛行機の中でもたっぷり寝たし、ドライブ中も寝ていればいいのであるから、特に強行日程という理由で疲れるということもない。

ドウンチェはカトマンドゥの北側にあるランタン谷の一筋南の谷に位置している。2003



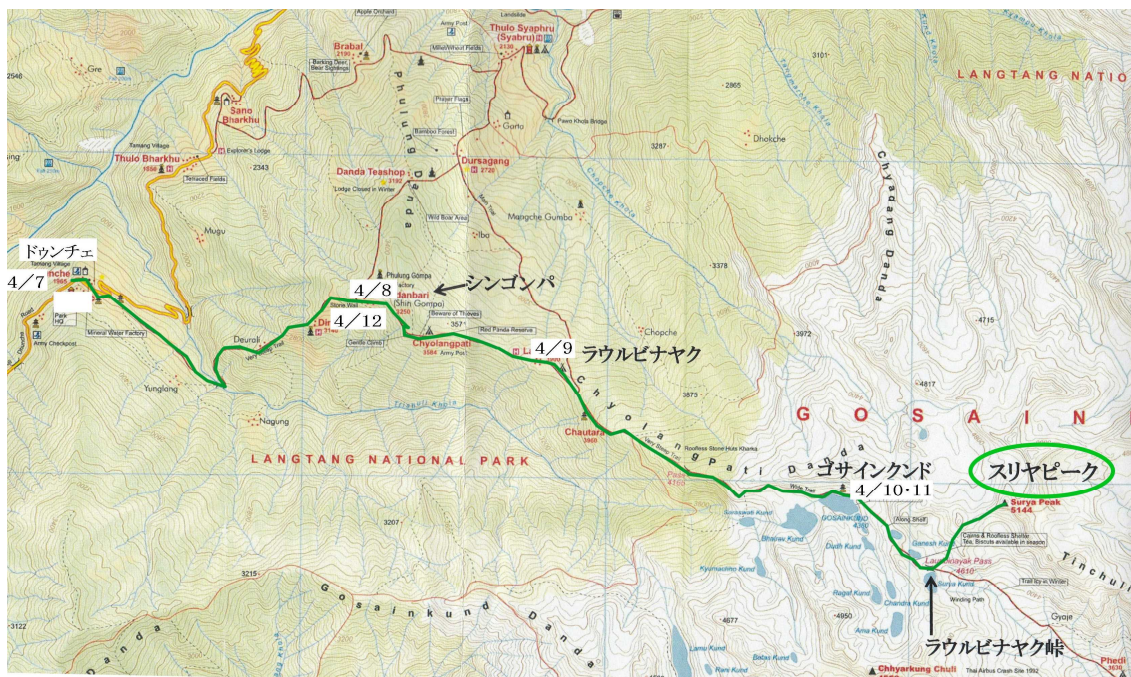
年に行ったヤラピークに近い。なおヤラピーク登頂の時に通ったキャンジンゴンパまでの道は、昨年の地震で破壊されて今でも不通のようだ。トレッキング初日から名峰ランタンリルン（7246m）の雄姿もたっぷり味わうことができた。

トレッキングの起点になるダウンチェ（標高約2000m）のロッジは、学生（高校生くらいか？）の試験中ということで混んでいた、入学試験ではないらしいが、ロッジに泊まってまでやる試験というのはどんな試験なのかはわからなかった。渡辺さんと私はみんなとは離れて隣のロッジで1室に寝た。まあ次にカトマンドゥに戻るまではふるにも入らないので、同室ということはこちらとしてはどうでもいい。むしろ渡辺さんのほうが客と同室では気を使ってしまおうだろう。



2 トレッキング行き

トレッキングの意味は、その土地に住む人は生活道としている道を歩くことである。だがここはゴサインクンド（4380m）などを通過するのであるから集落などはなく、あるのはロッジのみである。しかしゴサインクンドから先はカトマンドゥに至る云わば街道がつ



ながっているということなので、やはり立派なトレッキング道といっていいのであろう。

トレッキング初日は、ドゥンチェ 2 000m からシンゴンパ 3 250m まで一気に高度を上げる。段々畑を遠くに見ながらただひたすら登る。このようなところは物事を考えないで、

ただただ歩き続ければよい。途中、昨年の大地震で破壊されたバツティ（茶店）を見かける。持ち主は引き払ってしまったようである。

このコースは、私が知らなかったくらいであるので、マイナーなコースであると思っていたが、ケッコウバツティもあるし、各国のトレッカーとも顔を合わせる。例によって両掌を合わせて“ナマステ”（こんにちわ：イタリア語に例えればチャオ）の挨拶を交わす。時たま地震の時にできたと思われる地割れにも出くわす。

ドゥンチェをでてしばらくしてから出てきていたが、上のほうに



段々畑



途中のバツティ





来るとシャクナゲがたくさん見られるようになった。真っ赤なのや、ピンク、真っ白などいろいろなバリエーションがある。ネパールの国華である。日本で見かけるシャクナゲは低木で細い枝に咲くが、この地方では大木に咲く。サーダー（シェルパのリーダー）のドロジーの話によれば、8種類のシャクナゲがあるという。ドロジーは日本語がペラペラである。日本にも何回も来ているみたいだ。燕山荘で働いていたこともあるといい、群馬県の山岳関係者との交遊も深いみたいだ。シャクナゲは英語辞書では rhododendron であるが、これはヨーロッパでの呼び方であるみたいだ。ネパールやインドではラリーグラスと呼んでいる。RareyGrass かと思ったら、バッチェの看板に出ていたスペルは Laliguras であった。こちらにはこちらの流儀がある。ゴンパとはお寺の意味であるので、もちろんシンゴンパの集落にはゴンパがある。我々



が気楽に土足で上がっていたら、あとから来たシェルパのガイドたちがきちんと靴を脱いで敬虔なお祈りをささげていた。俺たちもここでは外人さんであるんだなあ。

ドロジーの説明ではこれはサクラソウである。ボンボンのような形をしているので、人工的に改良されたものかとも思ったが、ケッコウ山の中でもこの形で咲いている、可愛い花である。

トレッキング 2 日目は、シンゴンパからラウルピナヤク 3 930m へと高度を上げる。標高 3 800m くらいでようやくシャクナゲの森を抜けて森林限界を超えると、眺望は一気に開ける。ランタンリルンを含むランタン山群はもちろんのことガネッシュヒマール山群も間近に迫り、マナスル山群やアンナプルナ山群も遠望できる。ドロジーはマチャプチャレも見えるといったが、私には識別できなかった。行動中遅れる人も出てきた。川越 A さんは 300 坪の畑を一人で面倒みているというが、山はちょっと弱いようだ。川越 B さんがいつも一緒に歩いてあげて面倒見がいい。体重 40 kg を割ることもあるというが、小型高性能の人である。K2 登山隊に



サクラソウ



ランタンリルンをバックに



ガネッシュ山群

加わってベースキャンプまで行ったこともあるというので、見かけよりもハイレベルな人みたいだ。

トレッキング 3 目でようやくスリヤピーク登山の基地であり、山上湖がたくさん点在するゴサインクンド 4 380m に着く。途中スリヤピークに登って降りてきたという日本人グループに会う。相手のツアーリーダーは渡辺さんの知り合いらしく、スリヤピークの雪の付き具合などを説明してくれていた。これからエベレストに登るそうである。そのため的高度順化で来たみたいだ。

これまでのところ天気は上々であり、私の血中酸素濃度は 76% と少々低めではあるが、高山病症状の気配はなくまずまずといったところだ。ゴサインクンドの山上湖を川越 A さんと一周して高度順化を図る。



ゴサインクンドの山上湖



ゴサインクンドのロッジ

3 スリヤピーク 5 144m 登頂

いよいよスリヤピークの登頂である。川越 A さんは登頂を断念。茨木 A さんと茨木 B さんは高山病の兆候かと思われる下痢のため、この日のうちに標高 3 600m くらいのところにあるロッジに降ることになった。従って登頂を目指すのは 5 人ということになった。山上湖のへりをしばらく歩いた後、トレッキングルートを外れて登山道に入ったとたんに様相は一変した。岩がゴロゴロで道などというものはない。なんとなく歩けそうなところを見

つけて足を踏み出すだけである。日本の山で言うなら、五竜岳からキレット小屋へ向かう尾根道のきついところが 3 時間以上続くとしても表現したらいいだろうか。この道に入ってからすぐに苦しさを感じた。今回はもう登頂はあきらめようと思った。トロンパスの峠越えの時に勝る苦しさだ。あの時は標高で 5 000m を歩くにしてはペースが速すぎたが、今回はペースはそれほど早くない。それなのについていけない。立ち止まって深呼吸を 4・5 回繰り返してまた歩き始める。“もう止めます”と何回思ったことか。そんなときに限って渡辺さんやサーダーは傍にいなかった。傍にいたら即止めていた。ただし長



岩ゴロゴロの登山道



い山登り経験の中で、雨などの天候のせいで登山停止したことはあるが、バテテ止めたことはない。止め方を知らないから登り切ってしまったとでもいえば正解かもしれない。山登りは体の健康と心の安らぎのために続けている。それなのに今回のようにキツイのは命を削るようなものである。もう 2 度とこんな処には来たくない。このバテ方は高山病の要素も入っていたろう。しかし頂上に立ってしまったからは頭痛を感じることもなかった。やはり老化による体力の落ち込みが一番のバテ要素であったかもしれない。生まれて初めて自分のサブザックをシェルパに持ってもらった。まあジジイ代表はからつきしだらしな

かったが、K2 ベースキャンプの川越 B さんでさえバテていた感じであったので全員同じようなものであったかもしれない。唯一外国の山は今回が初めてといていた川越 C さんが一番強かった。どこでも平気な顔をしていた。女は怖い。今までの山登り経験の中でも最大級のバテ方であったが、頂上に立ってしまえばいつものように万々歳でしかなかった。下りではシェルパが手を引いて導いてくれた。至れり尽くせりだ。そのおかげで登頂できたわけである。14 度目の 5 000m は超難産であった。

4 トレッキング還り

3日かけて登ったところを2日で降る。しかも 2 日目はカトマンドゥまで行ってしまふのである。しかしまあ降りには本



来楽なはずであるが、とんでもない苦労が待っていた。登頂しないで先に降りた彼女らと同様に下痢である。寝ているときも目が覚めるとトイレに行きたくなって 1 時間ごとに行ったこともあった。食べ物が信用できなくなったので飯が食えない。出るものがないのに大がしたい。白い泡状のものしか出ない。ケツがションベン穴になっている。カトマンドゥに降りても、飛行機に乗っても、家に帰っても治らなかった。結局家へ帰ってから 5 日目くらいに、やっとクソの形と色を取り戻した。何を食べても、どこの国へ行っても“旨い、旨い”とって何でも食べる俺としたことが。

下りでは昨日生まれたばかりという赤ちゃん馬に出会った。馬は生まれた時から立つものかと思っていたが、授乳するのにオヤジの助けを借りていた。



5 カトマンドゥ

最終日は 23 時にはカトマンドゥを出発する。孤児院と老人施設を兼ねた「母の家」という施設を訪れた。旅費の一部を割いてお米をお土産として届けた。いかにも新聞社を親会



社とする旅行社らしい配慮である。

子供たちがクリクリした目を輝かせて“こんにちわ”と挨拶してくれた。日本語の授業も週3日あるという。それもさもありなん。我々を案内してくれたのは“彦一”さんと名乗る日本語ペラペラのお兄さん。日本人の血も入っているのでは？と思わせる顔つきである。おじいさんがこの名前を付けてくれたらしい。日本でも十数年間働いたことがあるらしい。白髪でインド系と思われる顔立ちの校長先生を心から敬愛している様子で、彼の“子供たちがここにいる間だけではなく、一人の人間として独り立ちできるようにすることを願っています”という言葉が心に残った。

事前に渡辺さんから、“皆さんも何かプレゼントがあったら持って行って下さい”と言われていた。我々のメンバーのうちの一人がクレパスを用意していた。この絵はそのクレパスで子供たちが描いたものを、彦一さんが渡辺さん宛に送ってくれたものの一部である。



これらの写真は、渡辺さんによる撮影である。



後ろがランタンリルン



これはお土産として買ったバッグである。私はこれが気に入っていて、夏の上着のポケットがないときの、財布などの物入れとして使っている。

